

2014年11月2日 主日礼拝

説教「荒野のマナ」

出エジプト記 16章 31-36節

【これは何だろう】

神さまが荒野でイスラエルに与えたマナ。それは、みんなが見たことがないものでした。だから、彼らはマナを「これは何だろう」と呼びました。マナというのは「これは何だろう」という意味です。イスラエルは40年間、「これは何だろう」と言ってマナを食べました。神さまが毎朝くださるこの不思議なものは何だろう、と呼びながら食べたのです。毎朝降ってくる神の恵みのパン。それは、慣れてしまうべきものではありませんでした。毎朝、不思議だねえ、と言いながら、食べるべき物。そうやって自分たちを養ってくださる神さまの大きな愛を思いながら食べるべきものだったのです。

【礼拝者たち】

今日、私たちは召天者を記念する礼拝を献げています。彼らは礼拝者たちでしたが、毎週、同じことをくり返しているとは思っていませんでした。彼らは、神さまがほんとうにおられると信じていました。それも彫刻のようにただそこにある、というわけではありません。神さまは、生きておられる。だから、毎週礼拝の中で、会ってくださる、そう思っていました。まるで恋人に会うように、そのこ

とを楽しみにしていたのです。今日は、神さまはどんなことをおっしゃるだろうか。今日は神さまとどんなことを、することができるだろうか、と。神さまはいつも私たちをびっくりさせ、楽しませてくださいます。喜ばせてくださいます。「これは何だろう」は、喜びの言葉です。神さまが与えてくださる恵みを喜ぶ言葉です。

【天からのパン】

出エジプトから、1500年ほどたって、イエス・キリストがこの世界に来られました。神が人となって、現れてくださったのです。主イエスは、こうおっしゃいました。「わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります・・・わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません」（ヨハネの福音書 6:32、35）。主イエス・キリストは、ご自分がマナだとおっしゃいました。ご自分を食べる者は、いのちを与えられると。主イエスは神さまの愛の食べ物。マナも愛の食べ物だけれども、主イエスは神さま。神さまご自身が私たちのところに来てくださった。そして、自分を与えてくださいました。十字架の上で。

私たちが、「これは何だろう」と言うほどに、毎日を生きることができると。召天

者記念礼拝は、召天者を記念する以上に、もっと深い意味があります。それは、召天者の人生をすばらしい者にしてくださった神さまに感謝することです。

主イエスは、私たちの人生を、喜びと驚きに満ちたものにしてくださいます。毎日の家事や、仕事を、単なるくり返しではなく、喜びをもって神さまと人に仕えていくチャンスに変えてくださるのです。主イエスはそのために十字架にかかってくさいました。主イエスはすべての人に必要な愛の食物です。

【過去でも、未来でもなく、今を】

イスラエルには、マナに飽きてしまった人々も多くいました。彼らは過去を振り返って「またマナか」とつぶやき、また「早く、マナ以外のものが食べたい」と嘆きました。

私たちが過去を通して今を見ることがあります。過去の自分の失敗や、他の人の欠点にしばられて、「どうせ、今日も」と考えます。今、神さまがくださる恵みを見ようとしなないことがあるのです。逆に、未来を見て、あの人さえ変わってくれたら、自分さえもつと努力したら、と考え、すでに、神さまが今注いでおられる恵みから、目をそらすのです。

けれども、今ある恵みに目を留めるなら、今なすべきことに、とりかかることができます。主イエスの恵みは、私たちに喜びをもって今を生きさせてくださるのです。

